

学習障害（LD）等への支援のために

# 見つめよう一人一人を

- ・一人一人の理解のために
- ・一人一人のニーズに応じた支援のために



## 学習障害（LD）とは

全体的な知的発達に遅れはなく、多くのことは他の子どもたちと同じようにできるのに、ある特定のことができない状態がみられます。



### 学習障害の定義（平成11年7月2日、文部省）

学習障害とは、基本的には、全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する、または推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。

学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない。

例えば、このようなことで苦労している子どもはいませんか。  
 聞いたことをすぐに忘れて、何度も聞き直す。  
 文字や行をとばして読む。  
 自分の言いたいことを表現するのが苦手。  
 鏡文字になったり、形の整った文字を書くことが苦手。  
 単語は正しく書けるが、文章の表記では混乱する。  
 繰り上がりや繰り下がりの計算でのミスが多い。  
 計算はできるが、文章題でイメージできない。  
 図形問題が極端に苦手。

このようなつまずきは、特に低学年の場合、一般的にも見られますが、LDによることもあります。

LDの場合には、これらのいくつかが学年が進んでも見られます。しかし、それは本人の努力不足や親の育て方によるものではありません。

**LD等のある子どもには、特別な配慮や支援が大切です。**

## LDの周辺と思われるすがた

LDやその周辺の子どもの中には、学習上のつまずきとあわせて、次のような状態のある場合があります。

ぼんやりと空想にふける。  
 指示や話を聞いていないように見える。  
 じっとしていられなかったり、手遊びが多い。  
 興奮しやすい。  
 出し抜けに答えたり、話題を急に替えたりする。  
 一つのことに、短い時間しか集中できない。  
 周囲のちょっとしたことに気をとられやすい。  
 突発的な行動をする。

こうした子どもの中にはADHDと診断されている子どももいます。

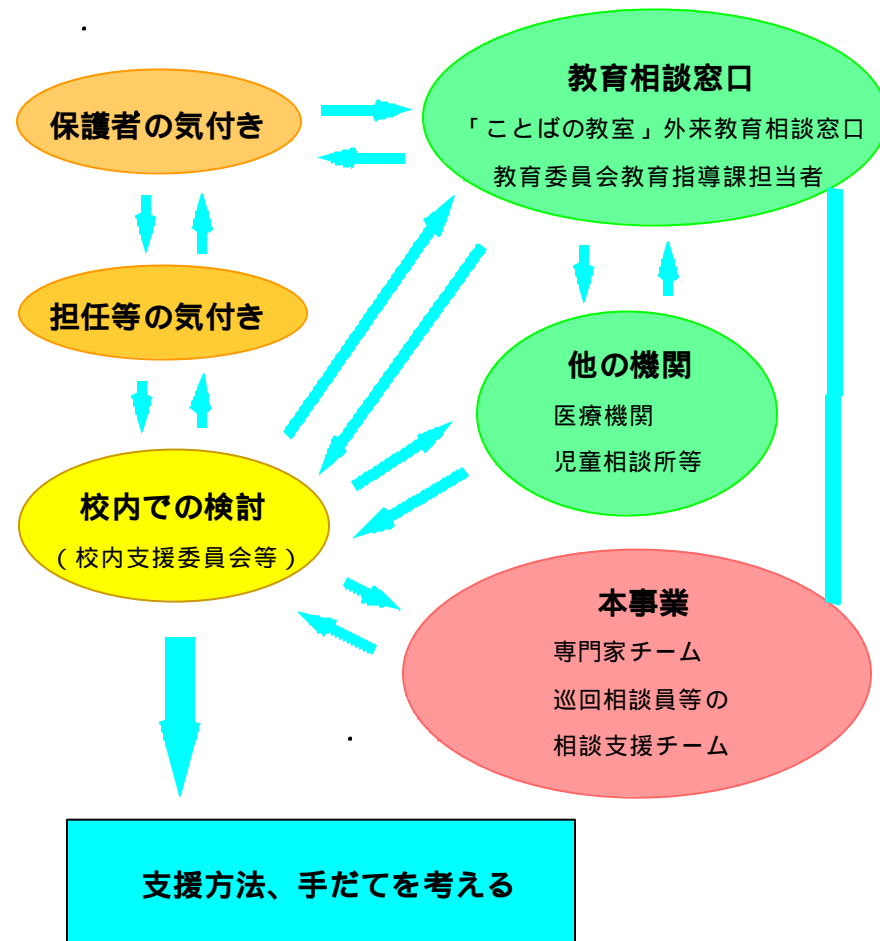
興味のある話題では、聞き手の気持ちに気付かず延々と話す。  
 微妙なニュアンスやことばの裏の意味がわからない。  
 感覚が極度に過敏、または鈍感。  
 新しい場面や刺激の多い環境では、混乱してしまう。  
 友達との人間関係や行動面でのコントロールが苦手。  
 身体の運動にぎこちなさがあったり、手指が極端に不器用。

こうした子どもの中には広汎性発達障害（PDD）と診断されている子どももいます。



## L D 等へ支援体制

<支援体制図(例)>



(本事業研究指定地域の宇治市の例)

### 一人で悩まずに相談しましょう。

京都府総合教育センター障害児教育部(直通:075-612-2953)で相談を受け付けています。また、市町村においても、「ことばの教室」などで相談を受け付けているところがあります。(相談窓口は市町村によって異なります。)

## L Dのある子どもへの

L Dのある子どもたちは、学習を怠けているのではなく、やる気がないのではなく、その子に固有の認知特性のために、聞く、話す、読む、書く、計算する、推論するなど、特定の能力が十分に発揮できないのです。

このことが正しく理解されず、常識的であっても、その子には不適切な対応をされることにより、自信をなくしたり、情緒が不安定になったり、登校をいやがるようになる子どもも生まれています。

子ども一人一人の「学びにくさ」を正しく理解し、適切に対応することで、本来の力が発揮できるのです。



L Dは、“Learning Disabilities”の略語ですが“Learning Differences”とも言われています。「できない」のではなく、「学び方の違い」(その子に固有の学び方)と理解することが大切です。

### 子どもを大切にしたかかわり

子どもの話に耳を傾け、適切な声かけや働きかけをしましょう。子どもの良さを認め、意欲的で主体的な活動を引き出すようにしましょう。

### 学校全体でのかかわり

学校ではすべての教職員が共通理解を図り、それぞれの立場で関わっていくことが、学級担任の指導をより確かにしていく鍵です。理解を深めるための校内研修を行ったり、教育相談を実施するなど、学校や地域の実態に応じて取り組みを工夫しましょう。「学び方の違い」について、校内で検討したり、指導の工夫をしていきましょう。

### 誰もがクラスの主人公に

一人一人が学ぶ主体であり、存在感が感じられるクラスでこそ、L Dのある子どもも本来の力を発揮することができます。

## 特別な援助や配慮

### 学習環境を整える

落ち着いた学習の雰囲気をつくる。  
机の上や身の回りの整理・整とんの仕方に配慮する。

### 成就感を持たせる

子どものできるところから始める。  
小さなことでも認め、できたことは具体的にほめる。

### 自信を持たせる

子どもの得意なことを認め、自信を持たせる。  
得意な面を伸ばし、やればできるという気持ちを育てる。

### 見通しを持たせる

一日の予定を知らせたり、学習の手順・方法を一緒に考える。  
学習に具体的な目標を持たせる。

### 自律性を高める

具体的な目安を示す等して、自分で判断できるようにする。  
係り活動などをやり遂げることができるように工夫する。

### 援助の仕方を工夫する

子どもにあった課題を取り上げる。  
方法を具体的に理解できるようにする。  
ことばで説明しながら、実際にやって見せたり、絵や図などを使ったりする。  
学習の手順を声に出して確認するように促す。

### 担任がL Dのある子どもを理解するモデルになる

まず担任がL Dによる困難点を理解し、適切な対応を示すことが、子ども同士で個性の違いを認め合う一歩となります。

詳しい情報は...

京都府総合教育センターホームページ「障害児教育」

URL (<http://www1.kyoto-be.ne.jp/ed-center/cont8.htm>)